

一朝の礼拝から 1—

生きる意味

マタイによる福音書 6 章 34 節

日頃から、自分はなんのために生きているんだろうと考え続けています。この所、考えていることは、人は何かをするためとか、何かを話すために生きているのではなく、ただそこに在るために生きているだけで十分ではないかと考えるようになりました。例えば、猫たち。彼らは他の猫に気に入られようとしたり、出世したり、より多くのものを所有したいなど考えません。日々、食べては寝ての繰り返しです(時々会議はしているようですが・・・)。しかし、我々は彼らの存在によって癒やされているのは事実ではないでしょうか。もちろん、猫たちは人を癒そうと生きているわけではありません。受け取る側の受け取り方だと思います。キリストも何をしたか、何を行ったかより、存在することによって多くの人が癒やされた(今も)のではないかと考えます。

また、能動と受動について考えてみた時に、極論になるかもしれませんが、何かを人に与えることはできない、ただ受け取ることはできるのではないかと。つまり、教師は学生に教えることはできないけれど、学生は教師から学ぶことはできる。さらに言えば、われわれは神を愛することとはできないけれど、神から愛されることはできる。神が用意してくださった多くの恵みを受け取れるように、自分が変わり続けていくことが大切なのではないかと思います。

最後に、昨日私が作曲した曲を聴いていただいて締めくくりとしたいと思います。音楽もまた、作曲者が何を表現したいかではなく、聴いた人がどう感じるか、どう受け止めるのかが、最も重要なことかもしれません。



安川徹作曲「旋律第 217 番」変ニ長調(QR-Code から視聴できます)

安川 徹 (音楽学科)

一朝の礼拝から 2—

活ける水 — 神の愛 — が夢の花を咲かせる

ヨハネの手紙 4 章 10 節

ある人が「私は神がいると思ったことはありません。神がいるなら世界で起こっている戦争や犯罪は起こらないと思うからです。この疑問から、礼拝出席を苦痛に感じることもあります。本当に神などいるのでしょうか」ということを言っているのが聞こえてきました。

この問いの答えは何でしょうか。誰も神をその目でみたことはありませんが、神を信じるとは見たことがある、見えるから信じるという意味ではないと思います。よく神の領域という言葉が聞かれます。医療が発達した現代でも、重病人が回復するかは神の領域である等言われることがあります。人は感覚や人知を超えたものに出会ったとき、それを神と認識するのでしょうか。

キリスト教は愛の宗教と言われます。ヨハネの手紙 4 章 12 節では、「わたしたちが互いに愛し合うならば(中略)神の愛がわたしたちの内で全うされているのです。」とされています。神は私たち人間を、愛をもって創造されたことは、この言葉からも明らかです。

この人に一つだけ言えることがあります。見えないから信じないということではなく、神を信じることはその存在を信じるというよりも、神の愛を信頼することです。私たちは生きていく途中で何かの間違いを犯します。その結果大きなことが起こることもあります。それでも、私たちが神の愛を信じ、受け取った愛を周りの人にも与えることができれば、世界は良い方向に向かうと思います。

学院の校章を思い浮かべてみると、神から与えられた水を他の人にも与えるということを形にしています。校章のように神から与えられた活ける水が、学生生徒の夢の花を咲かせることができればいいと思います。神を信じるか信じないかは、自分次第なのかもしれませんが、神の愛が与えられていることに気づき、周りにもその愛を授けることができるよう生きていくことは、素敵なことではないでしょうか。

中野 忠彦 (教務課)